

英語の接辞付加について

高橋 渉

1. 目 的

本研究の目的は英語の語形成に関して従来から論じられているさまざまな問題の中から、接辞付加に関してのいくつかの問題を可能な限りの実際例を検証しつつ再検討することである。事例の検索には、高橋（1995）において作成した英単語リストを利用することにする。この英単語リストはある学習用英和中辞典の見出し語のほぼすべてを電子辞書化した総語数 55,188語、UNIX 上で528,592バイトにおよぶアスキーファイルである。以下 dicfile と略記するこのファイルに対し、UNIX システムが提供するいくつかの文字列処理コマンド、特に grep における正規表現を援用することによって該当する語群を検索し分析を行った¹。

2. 分 析

2.1 はじめに

統語論（とりわけセンテンスグラマー）がその分析対象の最大の領域を文とするように、（英語）形態論はひとつの英単語をその最大の分析対象とする。すなわち形態論は単語の内部構造を分析することがその中心課題となるのである。たとえば unhappiness という単語を例にとってみよう。この単語はこれで1つの単語として機能するが、その内部はさらに un-, -happi-(=happy), -ness という3つの意味を持つ最小の単位（形態素）に分割される。これらの形態素はそれぞれ独自の意味を担うとともに、他のさまざまな語に繰り返し生じることがわかる（e.g. *uncertain*, *unkind*, *happily*, *hotness*, *rightness*, etc.）。

さらに形態素は単語の中で単に左から右に線的に並べられているのではなく、さまざまな構造を持って構成されていることも重要な事実である。Quirk *et al.* (1972: 979)では次のような例があげられている。

- (1) a. the *un-*+*masked* intruder ('the intruder who was not masked')
 b. the *unmask*+*-ed* intruder ('the intruder from whom the mask had been removed')

単語のレベルでのこの両義性（ambiguity）は *unmasked* という語が単に un-, mask,-ed という3つの形態素が左から右に線的に並べられているのではなく、上記のように un-+masked あるいは unmask+-ed という二つの構造のどちらに解釈されるかによって、言い換えれば *masked* という分詞形容詞に否定の un- という形態素が付加されたのか（=(1a)）、あるいはまず動詞 *mask* に un- が付加され、ついでそのあとに -ed が付加されたのか（=

(1b)) という相違から生じる両義性なのである²。

このように形態素の結びつきにおいては、その付加される対象 (=base) の品詞やその他の以下に論じる要因に起因する様々な条件を考慮する必要がある。付加される形態素はどんなものでも自由に base に付加できるのではなく、その組み合わせにはかなりの制限が存在することは、ことに語形成における生産性を論じる際には見過ごすことのできない重要な事実であり、これこそが形態論の生産性と統語論の生産性には本質的な相違があると主張する研究者たちの論拠となっている³。

本稿では特に接辞付加に議論をしぼり、これらの制限がどのようにはたらいっているのかを、前述の電子化した辞書ファイル中の語群を検索することによって検討することにしよう。

2. 2 -ness と -ity

この2つの接尾辞 -ness, -ity 双方とも、形容詞の base に付加されてその形容詞を抽象名詞化する働きを持つ、英語の語形成の中では極めて生産性に富む接尾辞である。しかしその生産性は次の理由からある種の差異が認められる。

- (2) a. -ness : base における強勢の位置を移動させることはなく、また base の音の変化も伴わない。i.e. happy-happiness, sad-sadness, etc.
- b. -ity : base における強勢の位置の移動、音の変化を伴う場合が多い。base の第一強勢が -ity を付加すると規則的に -ity の直前の音節に移動する。また base 末尾の [k] の音が [s] に変化する。i.e. electric-electricity, plastic-plasticity, etc.

強勢の位置の移動とは結局の所、竝木 (1985) 他言う接辞 (特に接尾辞) を第 I 類 (強勢の位置を変化させる) と第 II 類 (強勢の位置を変化させない) の2つに区分することの根拠となっている現象である。

さてこのように -ness と -ity は、同じ機能を持ちながらも接辞付加の際にはその出力結果に大きな相違があることがわかった。また単語の形態的な条件としては、-ness がほとんどどんな形容詞にも付加できるのに対し、-ity の方は [+latinate] というラテン語、またはフランス語起源の英単語が持つ素性を付与された形容詞に付加されることが多いことも知られている⁴。

さらに base に課される音韻的条件として -ity は -able, -ible, -al, -ic 等の接尾辞が語末に存在する語の大多数に規則的に付加されることがしばしば指摘されている。表(3)を見てみよう。

(3)

語末	生起数	語末	生起数	語末	生起数	語末	生起数
-able	792	-ible	154	-al	1596	-ic	1268
-ability	146(18.4%)	-ibility	72(46.8%)	-ality	120(7.5%)	-icity	32(2.5%)
-ableness	62(7.8%)	-ibleness	13(8.4%)	-alness	29(1.8%)	-icness	0(0%)

表(3)は dicfile に含まれる -able, -ible, -al, -ic で終わる単語の生起数と、それぞれに対応する -ability, -ableness, -ibility, -ibleness, -ality, -alness, -icity, -icness の生起する回数と割合である。この表からわかることは、-ity が付加されやすい接尾辞といわれる -able, -ible, -al でさえ、-ity が付加された単語の割合には遠く及ばないまでも、-ableness, -ibleness, -alness それぞれかなりの生起数が見られることである⁵。ただし -icness は一例も存在しないが、これは -ic は直接 -ness が付加されるのではなく、まず接尾辞 -al が付加されその base に -ness が付加されるためと思われる。このように -ity の付加されやすい音韻条件を持つ単語でさえ多くの -ness タイプの語を持つことは、接尾辞 -ness の生産性が極めて高いことを示すものであろう。

また -ness の生産性の高さは次のような単語が dicfile に見られることから確認できる。

(4)	Adjective	Noun	-ness form
	adhesive	adhesion	adhesiveness
	aggressive	aggression	aggressiveness
	broad	breadth	broadness
	dead	death	deadness
	deep	depth	deepness
	intimate	intimacy	intimateness
	serene	serenity	sereneness
	uncertain	uncertainty	uncertainness
	valid	validity	validness
	warm	warmth	warmness
	wide	width	wideness

これらの語群は形容詞の名詞形が -ion, -th, -cy など本来別の名詞を形成する接尾辞を持つ語がありながらも -ness を付加して抽象名詞を作り出している例である。また -ness は次のような比較的複雑度の高い形容詞にも自由に付加できるが、対応する -ity の方はそのような複雑な形容詞に付加されることはあまり見られない。

(5) a. honest-to-goodness, love-in-idleness, matter-of-factness,

stick-to-itiveness, up-to-datedness

b. over-credulity

我々のデータ dicfile には, self-awareness, warm-bloodedness を始めとする 2 語の組み合わせに接尾辞 -ness が付加された例は 52 例存在し, (5a) にあげた 5 例と合わせて 57 例の内部構造の複雑な単語に -ness の付加された例が見つかった。この生起数は -ness の生産性の高さを証明するに充分であろうが, -ity の場合は 2 語の例として (5b) にあげた 1 語しか存在しないことがわかった。

以上本節では同機能の接尾辞 -ness, -ity の 2 つの接尾辞の差異を dicfile 中からの実例を検索することによって検討し, -ness の格段に高い生産性を再確認することができた。

2. 3 -al と -ar

次に本節では名詞に付加されて形容詞を作る接尾辞 -al とその異形 -ar との関係を考察してみよう。

- (6) accident—accidental, center—central, culture—cultural,
dialect—dialectal, element—elemental, fiction—fictional,
globe—global, scribe—scribal, etc.

この形容詞を作り出す接尾辞は主としてラテン語などからの借入語に付加されるが, -al suffix は [l] が直前の音節 (すなわち base の最後の音節) に存在すると, 異形 -ar に変化することが知られている。

- (7) angle—angular (*anglal), circle—circular (*circlal)
module—modular (*modulal), pole—polar (*polal)
spectacle—spectacular (*spectaclal), table—tabular (*tablal)
vehicle—vehicular (*vehiclal), velum—velar (*velal)

これら(7)にリストされたラテン語起源の語群は base の最終音節に [l] を含むという共通性が観察され, 英語は [l] + -al という連鎖を避ける傾向が見られるとしばしば指摘されている⁶。

また Bauer(1983: 89), 大石(1988: 57), Quirk *et. al.* (1985: 1556) はいずれも, 英語には形容詞から副詞を作る -ly というふつうは極めて生産性の高い接尾辞があるのに, その base が -ly で終わっている語に接尾辞 -ly が付加されることは避けられる傾向が存在すると指摘し, 次のような例をあげている (例はいずれも大石(*ibid.*)による)。

- (8) *likelily, *uglily, *holily, *cowardlily, *wilily, *elderlily,

*sisterlily

ただし *friendlily*, *sillily* は例外。

では、このような隣接する音節に [l] が存在するときに -al, -ly が避けられるという現象は、[l] をセグメントの要素として持つ他の接尾辞 -ful, -less, -like, -let などではどのような分布を示すのか、dicfile における生起数をもとに検討してみることにしよう。

(9)

直前の音 \ 接尾辞	-ful(221)	-less(293)	-like(56)	-let(97)
l(e) _____	18(8.1%)	7(2.4%)	2(3.6%)	16(16.5%)
n(e) _____	20(9.0%)	29(9.9%)	12(21.4%)	3(3.1%)
g _____	5(2.2%)	7(2.4%)	3(5.4%)	6(6.2%)

表(9)の -ful を例に考察してみよう。dicfile 中には -ful で終わる単語は221語存在する。その -ful の直前が l または le (e は黙字) であるような単語、すなわち -ful の直前の音節のコーダ部分が [l] という音を持つ単語は18例見つけることができる。高橋 (1995) には、dicfile における語末の文字の生起率一覧表があるのでこのデータを参考に n (この文字で終わる単語は dicfile 中5020語, 9.1%存在する), g (おなじく1970語, 3.6%) という比較的語末に生起する確率の高い文字 (= 音) 2つを選び、これら2音が -ful の前に現れる率を計量すると、-n(e)ful, -gful それぞれ9%, 2.2%となり、むしろ確率的には -l(e)ful という l が近接する連鎖は、語末に -ful を持つ単語の中ではかなり高いと言わざるを得ない。また他の3つの接尾辞においても特に [l] が直前に位置することを忌避しているように見える数値は得られなかった⁷。

となると、(7)にリストされた語群が -al でなく -ar を接尾辞として選ぶのは、[l] の連鎖を忌避する流音異化の現象と言うより、他の原因を求める必要があるように思われる。

この -al, -ar という2つの接尾辞は、上述のようにラテン語起源の単語に付加されるが、じつはこの2つの接尾辞はそれぞれラテン語の形容詞を形成する派生接尾辞 -alis, -aris に由来することが知られている。Bauer (*ibid.* p.89) が指摘するとおり、これらの接尾辞はもともと -alis が基本形なのであるが、base に [l] が存在するときのみ -aris が選ばれるという。そして(7)にリストされた語群はもともとラテン語の段階で, *angularis*, *circularis*, *modularis*, *polaris*, *tabularis*, etc. のような形態をとっていたことが語源辞典などの記述から明らかになる。この中で、唯一 *spectacular* のみが英語に借入された後で類推作用によって -ar 形が付加された可能性を持つが、他の全てはもともとラテン語の段階で -aris 形の方を用いていた語であることがわかった。

ではなぜ、ラテン語では [l] を base に含む語には -alis ではなく -aris が付加されてい

るのかという疑問に対する答は依然未解決ではあるが、少なくとも、英語が語末部分に [1] 音が近接することを避けている訳ではないという我々の観察結果 (= (9)) はこのラテン語からの自動的な借入現象によって反証されることはないことがわかる。

さらに(8)に見られる -ly で終わる base に -ly がもう一度付加されることはないという現象も、英単語が [1] の近接を避けているからではなく、base 末尾とその直後に同一の音連鎖 (= syllable configuration) を作り出すことを調音・聴覚上の制約から避けていることが真の原因ではないかと思われる。

大石 (*ibid.* p.57) でも *fishish, *drudgish, *admonishment などの語が英語に存在しない理由として、接辞が同じ音の並びを作り出すことをきらう現象の存在を指摘している。となると英語には [1] の近接を忌避する現象が存在するというよりむしろ、base の末尾と接尾辞が類似した音連鎖になることを忌避していると述べた方が、より正確な記述となるのではないだろうか。

2.4 en- と -en

本稿の最後に、本節でとりあげる接辞は、名詞、形容詞に付加されて動詞を作る -en 接尾辞と、名詞、形容詞、動詞に付加されて動詞を作る接頭辞 en- である。接頭辞 en- は70以上ある英語の接頭辞のうち、数少ない品詞決定能力のある接頭辞の一つである⁸。接頭辞 en- を選んでも、接尾辞 -en を選んでもどちらも生み出す結果は同一であるこの2つの接辞は英語の語形成の中で、どのような使い分けがされているのかを検討してみよう。

まず -en 接尾辞について中尾 (1988: 205) は、この接尾辞は単音節の形容詞でかつ [k, d, p] で終わる base に付加されると述べているが、この記述のままではやや正しい事実をとらえきれていないように思われる。dicfile 中には -en を語末に持つ単語は477語見つかるが、もちろんこの中には過去分詞の屈折接辞、複数のマーカー、「～製の」を意味する同音意義の接尾辞 -en、または語幹の一部としての en などが含まれる。これらを全て取り去り、本節で検討対象とすべき -en で終わる語は次の67語ということになろう。

- (10) blacken, brighten, broaden, chasten, cheapen, christen, coarsen, dampen, darken, deaden, deafen, deepen, embolden, enlighten, fasten, fatten, flatten, freshen, frighten, gladden, harden, hasten, hearten, heighten, lengthen, lessen, lighten, liken, live, loosen, madden, moisten, neaten, quicken, quieten, redden, refasten, reharden, resharpen, restraighten, restrengthen, rewidened, roughen, sadden, sharpen, shorten, sicken, slacken, smarten, soften, steepen, stiffen, straighten, straiten, strengthen, sweeten, tauten, thicken, threaten, tighten, toughen, unfasten, waken, weaken, whiten, widen, worsen

リスト(10)から明かなことは、base の末尾は [k, d, p] ばかりではなく、chasten, deafen, freshen, heighten, live, lengthen のように [s, f, ʃ, t, v, θ] でも許されるし、heighten,

lengthen, strengthen の場合は形容詞ではなく名詞に -en が付加されていることがわかる。1音節語に限るという条件も embolden, enlighten, refasten, reharden, resharpen, restraighten, restrengthen, unfasten の8語で2音節語に付加されていることがわかる。ただしこの8語は完全な例外とは言えない。なぜなら、最初の2語は同機能の en- と -en が同時に base に付加されている例、残りの6語は 'again' の意味の re- や 'do the opposite of' の意味の un- が -en 接尾辞の付加のあとでさらに付加されている例と解されるからである。するとこの8語の特別な状況を考慮すれば、-en 接尾辞は普通1音節語に付加されるという観察は妥当なものと考えられる。

-en 接尾辞の直前の音に関する条件は、大石 (*ibid.* p.55) でも Halle の観察として言及されているが、そこではこの規則 (-en 付加) が適用される base は1音節の形容詞で、かつ「1つの阻害音」で終わっていることと指摘されている。しかしながらこの記述のままでは dicfile 中には存在しない、[b, g, tʃ, dʒ, ð, z, ʒ] も許されることになってしまうから、いずれにしても -en 接尾辞付加規則はさらに精密化する必要がある⁹。

つぎに同機能の接頭辞 en- (あるいはその異形 em-) について観察してみよう。接尾辞 -en の場合と同じく、dicfile からの検索結果からカテゴリーの異なる単語を取り除くと、en- 81, em- 28の合計109の語が該当する。これら109の語群は -en 接尾辞の場合と異なり、特に base に課される音韻的条件は見あたらないように思われる。

(II) base の音韻条件

- a. 2音節以上の語： encapsulate, encompass, endanger, enfranchise, engender, enanguine, envenom, embroider, emplacement
- b. 阻害音以外の音が enable, enacat, enchain, encircle, enfeeble, enkindle, enlarge,
base の先頭・末 embroil, emblazen
尾に生じるもの：
- c. 子音連結が base enclose, engraft, enshrine, entrust, entwist, embattle,
の先頭・末尾に生 emplane, etc.
じるもの

紙幅の関係から該当する語の全てはリストしていないが、接尾辞 -en と異なり接頭辞 en- (em-) は特に base に課される顕著な音韻条件は見あたらないように思われる。ただし形態論的条件から見れば、[+latinate] という素性を持つ単語、すなわちフランス語、ラテン語に由来する語群が多いことがわかる¹⁰。

以上の観察から同機能の接頭辞・接尾辞が base をはさんで付加されている上述の2語を除けば、一般的に接尾辞 -en のほうが付加に際しての制限が厳しいのに対し、接頭辞 en- (em-) は特に厳しい制限は存在しないように思われる。付加規則の精密化はいずれにせよ必要であろうが、少なくとも接頭辞・接尾辞のどちらを選択するかという問題に関しては厳格な規則が存在していることが予測できる。

3. 結 語

本稿では、英語語形成に関するいくつかの問題、特に接辞付加に際しての base に課される音韻的ならびに形態的条件について従来から指摘されている事実に関して、UNIX システムに備えられている文字列処理コマンドを具体例の検索に援用することによって、再検討を加えたものである。さまざまな条件が従来から提示されているが、われわれの持ったかたか5万5千語ほどのデータを検索すると、従来指摘されている以上の様々な条件がまだ語形成のプロセスには潜在していることがわかった。できるだけ多くの実例に依拠して語形成の諸規則を精密化していくことがこれからの課題となろう。

註

- grep コマンドにおける正規表現の有用性については高橋 (1992) ならびに UNIX 関連の解説書などを参照のこと。
- 形容詞に付加される un- と動詞に付加される un- はその機能が根本的に異なることに注意する必要がある。現在双方とも un- という形態をとるこの2つの形態素は起源的にはまったく別の形態素 (動詞についたものは元来 ent-) であったものが音変化によって現在は同音異義形態素となったものである。
- ただし Bauer (1983) はいくつかの実例とともに、両者の生産性には本質的な差異は存在せず、ただ形態論の生産性には統語論の生産性にいくつかの制限が加わっただけであると主張している。
- *happity vs. happiness, *cleverity vs. cleverness, etc. ただし OE 本来語の odd は例外的に oddity となる。
- dicfile 中に存在する -icality で終わる語 (11語)
criticality, impracticality, grammaticality, illogicality, logicity, practicality, technicality, theatricality, topicality, verticality, whimsicality
同じく -icalness で終わる語 (11語)
grammaticalness, illogicalness, logicalness, methodicalness, practicalness, quizzicalness, radicalness, technicalness, typicalness, tyrannicalness, verticalness
従って, grammatical, illogical, logical, practical, technical, vertical の5語は -ness でも -ity でもどちらの語も存在することになり, -al の後にたしかに -ity は付加されやすいが, それらの語さえも一部は -ness 接尾辞を持つことがわかった。-ness 接尾辞の極めて高い生産性を物語るものであろう。
- Kiparsky (1972 : 216) はこの現象を liquid dissimilation (流音の異化) と呼んでいる。
- 特に指小辞 -let は直前に [l] が存在する語がいちばん多いことがわかる。
- 竝木 (1985) はかの指摘するように, ふつう接頭辞は base の品詞を変えることはない (e.g. happy-unhappy) が, 接尾辞は品詞を変化させることが多い (e.g. happy-happily)。
- en 接尾辞の付加を許す阻害音 (あるいは逆に許さない阻害音) を自然音類で定義することはできないようであるから, 本稿では open question としておく。また dampen, strengthen, lengthen の3語は非阻害音 (= 共鳴音) + 阻害音の連鎖が生じている (nasal + obstruent) ことから, 「1音節の形容詞, かつ1つの阻害音で終わる」という一般化への重大な例外となること

- がわかる。
10. [-latinate] すなわちゲルマン語起源の語も *embank*, *embed*, *entail*, *entrap* などいくつか存在することがわかる。

参考文献

- Bauer, Laurie. 1983. *English word-formation*. Cambridge University Press.
- Katamba, Francis. 1993. *Morphology*. MacMillan.
- Kiparsky, Paul. 1972. "Explanation in phonology" In Peters, S. (ed.) *Goals of linguistic theory*. pp. 189-227. Prentice-Hall.
- Marchand, Hans. 1969. *The categories and types of present-day English word-formation*. C. H. Beck.
- 中尾俊夫 and 寺島勉子. 1988. *図説英語史入門*. 大修館書店.
- 大石 強. 1988. *形態論*. 現代の英語学シリーズ第4巻. 開拓社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1972. *A grammar of contemporary English*. Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- 島村礼子. 1990. *英語の語形成とその生産性*. リーベル出版.
- 高橋 渉. 1992. 「パーソナル・コンピュータを利用した英語語彙分析」信州大学教育学部附属教育工学センター紀要第8号. pp.61-72.
- 高橋 渉. 1995. 「英語辞書の構造」信州大学教育学部紀要第85号. pp.131-139.
- 高橋 渉 and 野澤重典. 1995. 「UNIX を利用した英語語彙分析」信州大学教育学部附属教育実践指導センター紀要第3号. pp.9-16.

(1995年11月28日 受理)